
IS 転生者なのか？

めれむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生者なのか？

【Nコード】

N7948Z

【作者名】

めれむ

【あらすじ】

暗闇の世界を通過してISの世界へとたどり着く
インフィニット・ストラトス

初投稿の何番煎じになるか分からないIS二次創作です。

原作崩壊、キャラ崩壊、他作品の要素を含みます。

苦手な方は読まない事を推奨します。

プロローグ（前書き）

初投稿作品故にいろいろ拙い点もあるでしょうが宜しく願ひします。

プロローグ

。。
ここは、何処なのだろうか。

何も聞こえず、見渡す限り真っ暗闇な空間が広がっている。

浮いているのか、沈んでいるのか。進んでいるのか戻っているのかもわからない。

急に何かもやの様なモノが自分の中に入って来る。

普通は体内に異物が入ると不快感を感じるのだが、これには不快感を感じなかった。

やる事もないのでそのもやの様なモノを真剣に受け容れる事にした。

。

受け容れ始めてどれだけの時間が経過しただろうか。

もつとも、視界に変化はなく音も聞こえない空間で時間の判別など出来るわけがないのだが。

もやを受け容れている途中に、生まれてからずっと感じる事のなかった感覚に襲われる。

例えるならそれは生きるか死ぬかの瀬戸際にいるようなものだろうか。経験してない以上ろくな例えにならないが。

恐らく戦慄という言葉がしっくり来るだろう。

受け容れ終わると戦慄は消え失せてしまった。結局、あのもやは何だったのだろうか。

そう考えていると急に視界に光が入る。

暗所、それも光のない空間になれきってしまった目に光をあてると非常に痛い。明順応なんてレベルの話ではない。

文句を言ってやろうと口を開ける。しかし、それは言葉らしい言葉を発せず、産まれたての赤子がするような泣き声を上げただけで終わってしまう。

わけもわからずパニック状態になってしまう。

そんな中、いきなり抱き上げられパニックが加速。

少しやつれているとはいえかなりの美人がベッドにいた。

「この子が…私達の子ね…」

…この黒髪美人が僕の母親だろうか。何故だろう、すぐにそう理解してしまった。

ベッドの横には優しそうな好青年がいる。この人が父親なら少なくとも両親には恵まれたと言えるよう。

「よく頑張ったな、俺達の子供はお前に似て綺麗になるぞお〜」

「あら、この子は貴方に似てとっても優しい子になってくれるわよ
お〜」

「あははははは！（うふふふふふ！）」

…良い両親なんだけど重度の親バカもといバカ親なようです。

人は見た目で判断するな、とはよく言ったものだねえ。

「シラー、この子の名前どうしようか？」

僕の母はシラーと言うそうです。

お願いですからいわゆるDONネームはやめて下さいね？

「ニール、慣習に従って真名はシオンはどうかしら？」

僕の父はニールと言うs…僕はアトラスの錬金術師とは違うぞ。

うん？慣習？真名って？

「シオン…ああ、真名は頭文字がSから始めるってヤツか。ならこの子の名前はセツナ・アナスタシア、そのまま真名はシオンでどうだ？」

「セツナ…いい名前ね、何か由来とかあるの？」

「歴史から見て一瞬にも満たない人生を幸せに生きてほしいから、かな（昔の仲間の名前ですだなんて言えるわけねえだろ…）」

…父さん。僕には普通に聞こえてるんですが。

「ぶつちやけると男女問わずこの名前はしっくりくるからだな」

父さん!!!?

「流石ニールね！そこまで考えてたなんて！」

母さん!!!?

駄目だこの両親、まともじゃない…ッ！

「見てニール、シオンが喜んでるわ！」

「いい名前を付けてもらえたからだろう」

∴ まあDQNネームじゃないから良しとしますか。

そんなこんなでアナスタシア家の一員になりました。

プロローグ（後書き）

気付いた方いますよね？

父は緑がパーソナルカラーのあの人です。

1・(前書き)

この作品はゆっくり更新する予定です。

長期休暇と重なった場合更新頻度を上げます。

これ、大丈夫かな？

引っ掛かるかな？とバクバクしております。

皆さんおはようございます。

もしくはこんにちは。

それともこんばんわが正しいでしょうか？

セツナ・アナスタシアです。

時間がたつのは早いもので、五歳の誕生日を迎えました。

あれから今までの出来事を簡単にまとめると、

・気が付いたらもう歩けるようになっていた

・文字が読めるようになってすぐに研究職の両親の蔵書を読んで理解する

・両親の研究に意見するようになる

・お絵描きで思い付いた事を書いて両親を驚かせる

僕絡みの主な出来事はそのくらいでしょうか。

「むにゃ…おにいちゃん…」

大切な事を忘れていました。

僕に兄弟ができました。

妹のクリステイナとフェルト、弟のリヒテンダールです。

クリステイナは面倒見が良くて、両親だけでなく僕もとても助かっています。

フェルトは人見知りが激しいです。いつも僕がクリステイナの後ろにいます。

リヒテンダールは…まあ、元気いっぱい困っています。

良い兄になれているといいんだけど…

あと最近、悩みは他にも一つありまして。

がちゃ、ばたん。

この時間帯になるといつもある部屋が騒がしいんです。

おかげで夜も眠れませんし、クリステイナ達を宥めるのに苦労します。

そろそろ苦情でも出すべきですかね？

あ、この部屋が問題の部屋です。両親の寝室ですけど。

がちゃ

「ああっ！来てっ、ニールう！！」

「うおおおおお、狙い撃つぜエえ！」

そこには、素っ裸の両親が取っ組み合いをしているじゃありませんか。

またプロレスごっこですか…。

…プロレスごっこですよ？

ええ、誰が何と言おうとプロレスごっこです。

異論は認めません。

『父さん、母さん。うるさくて全然眠れないんだけど』

「セツナ！？お前いつからそこに！？」

父は今お気づきのようです。

『今来たばかりだけど？』

で、プロレスごっこは何ラウンドしたの？』

「え？だいたい3ラウンドかなー」

…。今寝ろ、すぐ寝ろ！

アンタ達のおかげで安心して眠れないんだからさ！

『父さん、母さん。いつ寝るの？』

「母さん！父さんはもう眠いからプロレスはここまでにしな
い！？」

「え？ええ、そうね！母さんとっても眠いわ！セツナも早く寝るの
よ！？」

ぼふっ 布団に潜る音

…茶番は見飽きたよ、とか言うべきかな。

騒音問題も解決したし、僕も早く寝なくちゃ。

ばたん。

セツナ Side out

Side ニール

…セツナの奴、ありや絶対気付いてたな。

アイツは他の子供達と比べると行動も思考も全然ガキっぽくないし。なのに子供達に慕われているのはセツナの人徳の為せる技、というわけか。

だが、あの子の頭脳は早熟とは程遠い。

落書きで光学迷彩の数式やこの世界には存在しないはずの強化カーボンの化学式を書くあたり、異常だと言ってもいい。

今は誰にも気付かれてはいないが、もしその手の人間がセツナに興味を持ったら？

これからセツナが興味を持つ物が世界を揺るがせる程のものだったら？

…いずれにせよ命を狙われるようになる。

あの時のように家族を失う羽目になるのは御免だ。

今のうちに出来る事から始めていかねえとな…

「シラー、俺達がセツナ達をしっかりと守っていつ」

「くーっ、くーっ」

…まさか、まだ寝たふりを続けてるのか？

「おい、シラー？」

「くーっ、くーっ」

…あー、とにかく今からでも出来る仕込みは済ませておくか。

部屋の隅に置いてある箱が緑色につつすらと輝いた気がした。

ニール Side out

1・(後書き)

そろそろ登場人物紹介とかすべきですかね？

意見、感想、誤字脱字報告待ってます。

2・(前書き)

動きの描写がまともに来ないヤツがISS二次創作書いてていいの
かねえと思うようになりました。

本編入るまでに頑張らないと…

まだ原作キャラは出さない(迫真)

Side セツナ

どうも、セツナです。

今、僕は猛烈に困っています。

「よーしセツナあ！縄脱けの次はサバイバル技術だあ！カレーくらいい、作ってみせろあ！」

主に父さんのせいで。

そもそも、父さんはこんなに熱血漢だっけ？

こんな事になるまでの経緯を解説すると、

回想開始

朝起きてまずするのは妹たちを起こす事。

いつものようにクリスティナから起こしていく。

『クリス、起きて起きて』

ゆさゆさ

「んにゆ…おにいちゃ、クリスのおよめさん…」

モゾモゾ

…何が起きてるかわからないけど夢の中の僕、頑張つて！強く生きて！

このままじゃ平行線のままだなあ…いつも通りにやりますか。

そう思った僕はクリステイナの耳元に口を近付けて囁く。

『ねえクリス？お兄ちゃん今から出かけるんだけど、早く起きないと置いて行っちゃうよ？』

「おはようございますっ！！」

がばあっ！

『ん、おはよ』

「私、フェルト達を起こして来ますッ！／／／」

『うん、わかったよ』

とは言っても向かいのベッドなんだけどなあ…

と思ったのも束の間、後ろからいきなり黒い麻袋を僕の頭に被せられてしまう。

即座に腕を縛られ抵抗できないまま持ち上げられ、何処かへと連れて行かれる僕。

私のお嫁さんが変な人に誘拐されたと泣き叫ぶクリスティナ。

…クリス、まだ寝てるのかい？

。

持ち運ばれてしばらく経ち、いきなり投げられてしまった。

よくわからないまま鼻から着地。すっごい痛い。

手足と視界がフリーになったらこんな事した相手に、近所に住む顔色の悪いお兄さんから教わった“ハイパー銀色の脚スペシャル”をたたき込もうと思うんだ。

がさっ。

勢い良く頭の麻袋を引き剥がされる。視界が開けた事で僕は草原に
いるという事はわかった。

そして犯人の顔を見る。

そこには芋虫のように転がっている僕を見下ろすように父さんが立
っていた。

空気が凍り付く。

この男は仕事放り出して何やっているんだ。

「これからセツナをそこらのエージェントよりも強くさせる！名付けて、セツナ強化大作戦ッ！！」

…！？

回想終了

で今に至る、と。

あーあ、どう縛ったのか手首と足をぐるぐる巻きに縛った縄もほどけないし…

「ほらほらサバイバルに移行しないと昼御飯はもらえないぞー？」

嘘…でしょ…！？

『ねえ父さん！何で僕がこんな事しなきゃいけないのさ！？』

「早いうちからやっておいて損はないし、それがお前の身を守る事に繋がる！」
イラッ

しょうがない…こんなこともあろうかと、耳の裏に隠しておいた小型ナイフで手足の縄を切る。

さて、手足及び視界がフリーになったので。

父さん（目標）から一度距離を置いて助走、そして飛び上がる。

『ハイツパー、銀色の脚イイイ！！スぺっシャアウルツ！！』

どかつ

「へぶっ！」

叫びながら蹴りつけた後しっかりと着地。

とにかく父をぶっ飛ばす事には成功した。

別に怪我させたいとかじゃなくて、一発殴らなきゃ気が済まなかっただけなんだ。蹴りだけど。

そつえばこれは家庭内暴力になるのかな？家の中じゃないから当てはまらないよね！

「いてて…この調子なら計画からいろいろ省いて良さそつだなあ」

『父さん？帰ったらクリスマスに謝ってね？』

「俺は…嫌だね」

『父さん？帰ったらクリスマスにあやまつてね？』ゴゴゴゴ

「…はい」

その後、一緒に野外炊飯してカレーライスを堪能した。

結局、何がやりたかったのかはわからなかったままだけど、今度はみんなで野外炊飯したいと思った。

余談だけど、父さんは何も言わずに家を出て来たからか、帰ったらうちの女性陣が父さんを睨み続けていた。

母さんはフライパンを投げ、クリスは辞典のカドで殴り、フェルトはいかにも怒ってます！な視線を向けていた。

そして僕は被害者だからお咎めなし、との事。

セツナ Side out

Side ニール

今日はかなりの収穫だった気がする。もっとも、対価は大きかったが…

ふざけた叫びを除けばあの蹴りは相手の意識を簡単に奪っていく危険な技だ。

あんなもん誰に教わったんだ？

普通はあんな技、善悪の区別もつかないようなガキに教えるなんてまともじゃねえ！

まあいろんな銃の扱い方を教える予定の俺が言えた事じゃないが…とにかく、誰か大切な人に危険が迫った時にだけ“叫ばずに”使うように念を押しておかないとな。

あの技は奇襲に向いている。…ただ、叫びをなくせばの話だが。

「ちよつとニール！聞いてるの！？」

「…はい」

明日は伝えてから行こう。

もうあんな心身ともに痛い思いはしたくない。

フェルトの視線は強すぎだ。それも涙目と上目遣いだなんて思い出すだけでもう…じぶっ

ニール Side out

2・(後書き)

恋姫から持ってきた真名設定ですがセツナ本人は偽名に使える
いかなと考えてます。

いずれ偽名として使う予定です。

いつになったら本編に…

意見感想、誤字脱字等の報告ありましたらお願いします。

3・(前書き)

読んでたらいくつかミス発見

修正版をどうぞ。

ただやっちゃったのはそのままにしてあります。面白そうなので。

退かぬ(現状に)！媚びぬ(読者に)！顧みぬ(今後の更新を)！
は変えません。

Side ニール

セツナ特訓大作戦を始めて1ヶ月経った。

え？作戦の名前が違う？

…まあ気にするな。

そんなものはその場のフリーリングで何とでもなるんだし。

セツナにいろんな銃の扱い方を教えたんだが、
真綿が水を吸うようになってチャチなもんじゃない。

まるで“元から知っているかのような”手つきで銃火器を扱っている上に教えていないはずのベテランがやるような事もやってのけ、
更に本人は知らないと言うのだからタチが悪い。

今更ながら、セツナの交友関係を知りたくなっちゃったよ…

ピロピロリン

携帯が待ち望んでいた報告を知らせる。

「おっ、早いな。

流星は最速の男だ」

仕込みもだいたい済んできた事だし、仕事に専念しないとシラーに
またどやされるからな。

ふと、空を見上げて思う。

…なあ刹那。

お前は今、変わっているのか？

俺はこっちで背負う物がたくさん出来て、毎日がてんてこ舞いだが
とても充実してる。

少なくとも、もう得る事はないと思っていた物をいっぱい得る事が
出来た。

あの世界で変われなかった俺も、この世界に来て変わったんだと思
う。

なら、あのヴェーダ離れ出来ない堅物もきつと変われるに違いない。

うちのフェルトもそっちのフェルト以上に人見知りでな、名前は人
を表すって諺の意味をようやく理解出来たぜ。

フェルトもいろいろ抱え込んでるはずだからな…出来れば俺の代わ
りに相談相手になってやってくれ。

C Bの皆の事…頼んだぜ、刹那。

「ふーっ…やれやれ、こんな事考えるような柄じゃねえのにな。
これがホームシックってヤツかねえ？それともワールドシック、か
？」

そうひとりごちてタバコをくわえる。

かつての相棒がタバコをやめるよう喚く声が聞こえたような気がした。

案外この世界はあの世界と近いのかもしれないな。

ニール Side out

Side セツナ

最近になって父さんが“ロックオン・ストラトス”と名乗って仕事を
している事を知った。

何か理由があるのか聞いてみたら、

「父さんのアイデンティティーだ」と難しい表情で返されてしまった。

僕は『そっかあ…』としかこたえられなかった。

そういえば前に父さんと散歩してたら知らないおじいちゃんとお兄ちゃんの二人組が公園で叫んでいるのを見た。

この先はセツナビジョンでお楽しみ下さい

「行くぞ土オ門！！流派、東方不敗はア！」

くわっ

「王者の風よオ！」

ずびしい

「全身ツ！！！」

どどーん

「系列ツ！！！」

ばばっ

「天波ツ 侠乱ツ！！！」
「がきーん」

「見よ！東方はア、ああかく燃えているウツ！！」

ずどどどどどど

セツナビジョン終了

カッコいいなあと思って見ていたらいきなり父さんに視界を遮られてしまった。

「見るな！あんなもの成長に良くないっ！」

あーあ、カッコよかったのになあ。

翌日。

サバイバル技術はもうマスターしたし、

縄脱けは公園にいた熱いお兄ちゃんに教えてもらった。

格闘技はとうほうふはいつて言ってたおじいちゃんが

「小僧、良い目をしておるな。スジも良い。」

簡単な護身術を教えてやろう！」と言って教えてくれた。

まずおじいちゃんが実力を見たいからという理由で僕にお兄ちゃんと模擬戦をするよう言ってきた。

「まずは小僧の実力を見せてみる！」

『えっ。』

こっつの場合って簡単な型とか教えてからやるんじゃないの？

「何をしておる、さっさとせんか」

『あ、はい』

僕が適うわけないじゃないかと思って空手、バリツ、カポエイラ、八極拳、トドメに最速を信条とするクーガーお兄ちゃんが教えてくれた技いくつかをでたために組み合わせたオリジナルの型をやってみようとしたら。

「来ないのならば此方から行くツ！超級、霸王オ！電影弾ツ！！」

いきなりお兄ちゃんがぐるぐる回りながら突っ込んで来た。何で頭だけ回ってないの！？

『うひゃああ、気持ち悪いのが突っ込んで来たあっ！』

「なんだとオ！？」

すっ

ざざっ

すかっ

闘牛士のようにタイミングを合わせて左拳を地面に付けて軸にし、180°回ってかわす。

「何イ！？」

お兄ちゃんは通り過ぎて着地。

僕はその間に間合いを詰めてお兄ちゃんの背中に正拳を打ち込もう

とする。

『やあぁっ！』

が。

「甘い、甘いぞッ！」

すばぁんっ

お兄ちゃんはそう叫びながら上半身をひねって気弾を放つ。

『く、っっ』

僕は崩拳を打つ直前の姿勢から、カポエイラの要領で上半身を右に傾けて気弾を避ける。

すかさずその勢いを生かしたままお兄ちゃんを蹴り上げようとする。

ばしいっ

が、僕の左足はお兄ちゃんに掴まれてしまっ。

僕は右足だけで跳び上がり、左足と上半身をひねって右裏拳を背中に打ち込もうとする。

「フンッ」

ぽーんっ

が、跳び上がった途端に投げられてしまった。
当然、重力というものがあって。

『わわわっ!?!』

わたわた
どてーんっ

しりもち落下。

『いたたた…』

「どうした、お前の実力はそんなものか！」

…この人は五歳児の僕に何を求めているんだろうか。
僕はゆっくりと立ち上がる。

「ちよつとやりすぎたかな？」

頬から血が流れ落ちる。

さっきの気弾を避け損ねたかな？

『よーし、次でしょーぶだっ!!本気できてよね?』

するとお兄ちゃんの雰囲気ガラリと変わる。

「いいのか？本気で行くぜ？」

『言い出しっぺに文句を言う権利はありません、これは言い出しっ

ぺの法則っていいいます』

「いいだろう。」

「ハアアアア…トオリヤアツ!!」

え、何アレ？なんで金ぴかなの？しかも地面がメリメリ言ってるし…

「うおおお、俺のこの手が真っ赤に燃えるウ！

勝利を掴めと轟き叫ぶウ！

爆熱ツ、ゴツドオ！フィンガー！」

いやいや、どうして手が赤く輝くのさ!?

というかこっちも準備しないと！

距離を開けて助走をつける。

『しょおおげきのおーッ!』

「ハアアアア、石破ア！」

『ファアストブリッドオーツ!!』

「天ツ驚オけええん!!」

お兄ちゃんの必殺技？が目の前に飛んでくる。

瞬間、何故か最速を信条とするクーガーお兄ちゃんの言葉を思い出す。

〈回想〉

「まあ聞け、セスナ」

僕は飛行機関連の会社か。

『クーガーお兄ちゃん、僕の名前はセツナだよ』

「お？スマンスマン。お前さんに一つ魔法の呪文を教えてやるう。もしお前さんの身に危険が迫ったらこう叫べ。」

ラディカル・グッドスピード、つてな

『呪文つて叫ぶんじゃないの？』

クーガーお兄ちゃんはアホ毛のように飛び出た髪に掛けていたピンクのサングラスを正しい位置に掛けなおす。

「あー細かい事は気にすんなよセスナあ。」

『セスナじゃなくてセ、ツ、ナ！』

まったく。この人は直す気があるのか？

ばたん

もう話す事など無いと言わんばかりにピンク色の自己主張が激しい車のドアが閉まる。

「じゃあ、元気でなあセスナああイヒイイヤツハアアアイ！！」

ばびゅーん

きらりん

…父さんは僕の知り合いは変人ばっかだって言うけど父さんも大概変人と知り合いなんじゃないの？

〈回想終了〉

何で今思い出すかなあ？

今が危険なの？確かに当たったら蒸発しそうだけど。でもそうなたら多分父さんが

「乱れ撃つぜえええ！！」

って叫んで銃身が焼け付くまで撃ちそうだなー。おじさんはしそっただけ。

…あれ？おじさんって居たっけ？
まあいいや。

母さんなら冥王とか勇者王を持ち出して分子にバラされるか光になるか。

…どっちもヤバイよっ！！

叫ぶしかないかあ…

『ラアディカルツ グッドスピーードツ！！』

何か間違えた気がするが多分大丈夫だろう。

知覚速度が非常にゆっくりになる。

お兄ちゃんの必殺技？も非常にゆっくりになる。

…何かおまんじゅうみたいなの生首が見えた気がするが気のせいだろう。

お兄ちゃんの必殺技？に当たらないようにしてお兄ちゃんの背後に走って行く。

お兄ちゃんの後ろに回り込んで、跳び上がる。

同時に、知覚速度が元に戻る。

「なッ！？消えただと！？」

ここからなら、やれる。

『しゅんツさつのオ！
ファイナルブリッドオツ！』

ぎゅるるんっ

どじしゃあっ！…！

「ぐおっ！…！」

ぼてっ

ごろごろいじりっ

びたーん！

しーん…

『あ、あれ？』

…動かない？

死んだ？死んだのか！？

「子供だから力はない。

だが、それを速さで補い勝利する。

型は滅茶苦茶だが…

こやつ、磨けば光るやもしれんな」

『えっ？えっ？』

このおじいちゃんは何をいつているの？
力がないとまずこつはならないよ？

「小僧、流派東方不敗の門を叩く気はないか？」

『…ふええっ！？』

おじいちゃんは前に弟子は1人だけって…

「小僧、貴様の考えている事くらいわかる。

じゃがな、あやつはすでに免許皆伝。なら新しく弟子をとっても問題はない。」

うーん…でも、さすがにお兄ちゃんがやっただぐるぐる回るとか腕から気弾を射つのは出来ないよ。

ただお兄ちゃんの放った最終奥義を含め全て理屈で理解し説明しちやっただからか、更におじいちゃんの勧誘が激しくなっちゃった。

がしっ

「小僧、東方はおぬしを必要としておる！（こんなに才能溢れる逸材をほおってはおけん！）」

『え、ええ！？』

うーん、僕はクーガーお兄ちゃんの方がいいなあ…

面白いし、文化のお話とか為になるし。

「うさぎとカメの攻防はもはや哲学」の時が一番わかりやすく面白なお話だったなあ…

『うーん、じゃあねえ…』

僕は普通の子供でも出来る範囲内の事だけを教えてもらう事と2ヶ月限定を条件にOKをだしたら「小僧、冗談だ」と言われてしまった。

おじいちゃん、そんなに落ち込んだ表情すると説得力ないよ…

後でお兄ちゃんにライバル認定された。

僕は友達になつてくれるならとOKをだしたらお兄ちゃんは「だからキサマはアホなのだぁーッ！」と叫ぶおじいちゃんに蹴飛ばされてた。

ついていけないよ…

後で知った事だがおじいちゃんの名前は黒須修二、

お兄ちゃんの名前は香集土門という。

いつもこの公園の隅で修行してるんだとか。

「この公園に来ればワシがお前の修行を見てやるっ！」

また変な知り合いが増えました。

。

今日から父さんと一緒に銃の訓練をする事になった。

『父さん、母さんの助手って仕事はどうしたの？』

「既に母さんに説明済みだ」

…もう仕事については放っておこう。

父さんが説明してくれるとはいえ何故か既に大半は頭で理解出来てしまっている以上、役に立った説明は射撃時の心理状態とかその辺りで銃そのものの特性などは全て知っている内容だった。

『んしょっ…と』

「おいおい、父さんはそんな事教えてないぞ？」

『なんとなくこんな感じでやるのがただしと思ったんだけど、ま
ちがってた？』

「いや、マニュアル通りじゃないがあってる。

じゃ、試しに撃ってみる。
間違えてもこっちに向けるなよ?」

『当然でしょ?』

一連の機械的な動作を繰り返し始める。

がちいん

薬室に弾を込める。

ターゲットをセンターに入れてトリガーを引く。

だあんっ!

発射。

ちゅいんっ!

命中。

がしゃっ、からりん

薬莖を排出。

がちいん

薬室に弾を込める。

ターゲットをセンターに入れてトリガー。

だあんっ！

発射。

ちゅいんっ！

命中。

がしゃっ、からりん

薬莢を排出。

「…初めてにしてはすごいな（やっぱりおかしすぎる、俺の遺伝じや説明仕切れないくらいに…）。
じゃ、的を動かしてみようか」

『うん！』

丸っぽいのが動く。

僕の手も的の動きに合わせて動く。

そしてまた機械的な一連の作業を繰り返していく。

がちいん

薬室に弾を込める。

ターゲットの動きに合わせ、
センターに入れてトリガー。

だあんっ！

発射。

ちゅいんっ！

命中。

がしゃっ、からりん

薬莖を排出。

(…もしかして命中率92%の俺よりすげえんじゃねえのか?)

今は拳銃を正面に構えて撃つだけなんだけど、いつか映画で見たガ
ン⇨カタを試してみたいなあ…

セツナ Side out

さいきんお兄ちゃんが遊んでくれません。

お父さんと一緒にどこかへ行ったり、
公園で変な人たちとつるんでいるばかりで将来のお嫁さんとして先
行き不安です。

『二人とも最近相手してあげられなくてゴメンね？』
自覚はあったよね。

罰としてお兄ちゃんが家の中にいる間はフェルトと一緒にべったり
とくっついていよう。

むぎゅう

むぎゅう

『あの…？二人とも、動きにくいんだけど』

「あらあら、セツナも幸せ者ね？両手に花なんて」

『でも動きにくいのは嫌だなあ』

まだ言うのね？

こうなったら我が家で最強の切り札を使うまで！

私はむりやりお兄ちゃんの顔をフェルトに向ける。

フェルト、今だよ！

うるうる

…じーっ

フェルト必殺、涙目＋上目遣い。

『僕が何をしたのかわからないけどとにかくごめんなさい』

べたあー

うわ、土下座までした!!

フェルト、恐ろしい子!

クリステイナ Side out

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7948z/>

IS 転生者なのか？

2011年12月30日00時50分発行